

ビアトリクス・ポターとナーサリー・ライム

— テキストの挿入と削除から見えてくるもの —

中 澤 紀 子

0. はじめに

『ピーターラビットのおはなし』 *The Tale of Peter Rabbit* (1901, 1902) で知られるビアトリクス・ポター (Beatrix Potter, 1866-1943) には、23篇の「おはなし」 (the tales) とその他4つの作品 (other works) がある¹が、興味深いことに、その中には、少なからぬ数のナーサリー・ライム (Nursery Rhymes)²が含まれていて、少なくとも私には、彼女の〈絵〉と〈語り〉の世界の基底に、伝統的な口承のリズムを持った〈うた〉の世界が横たわっていることを暗示しているように思われる。特に、*Appley Daply's Nursery Rhymes* (1917) と *Cecily Parsley's Nursery Rhymes* (1922) は、その題名が示すように、全篇がナーサリー・ライムから成っていると言ってよく、また、ポターの初期作品の中にも、*The Tailor of Gloucester* (1902, 1903) や *The Tale of Squirrel Nutkin* (1903) のように、「おはなし」の中にナーサリー・ライムを多く含んでいるものがある。特に前者の『グロースターの仕立て屋』では、ポターは、イギリスに古くから伝わるお気に入りのナーサリー・ライムをたくさん織り込み (…weaving in many of her favorite traditional rhymes.)³、1902年12月に500

¹ Beatrix Potter, *The Complete Tales* (1989, 1997, 2002) の分け方による。

² Nursery Rhymes とは、イギリスをはじめとする英語圏で伝承されている詩や童謡のことを指し、「マザー・グースのうた」と呼ばれることも多い。

³ *The Complete Tales* (2002) p.38 About This Book より引用。

部を私家版として自費出版している。⁴ もっとも、翌1903年にウォーン社 (Frederick Warne & Co.) から出た版は、商業出版としての制約からか、ポターの懸念していたとおり、そのうちの多くのナーサリー・ライムが削除されたものになってしまった。⁵

上記4篇の「おはなし」の他にも *The Tale of Mrs. Tiggy-Winkle* (1905), *The Tale of Mrs. Tittlemouse* (1910), *The Tale of Timmy Tiptoes* (1911), *The Tale of Pigling Bland* (1913), *The Tale of Little Pig Robinson* (1930) などにも、ナーサリー・ライムが、そのままの形で、あるいは、形を変えて織り込まれている。

ポターの没後ウォーン社から出版された *Beatrix Potter's Nursery Rhyme Book* (1984, 1987, 1995) は、上で述べたポターの「おはなし」を含む

⁴ 『グロースターの仕立て屋』は、もともと1901年12月に完成し、ポターの元家庭教師アニー・ムーアの幼い娘のひとりウィニフレッド (愛称フリーダ (Freda)) へのクリスマスプレゼントとして贈られたもので、12の水彩画と多くのナーサリー・ライムを含む長いおはなしだった。

⁵ ポターのもとの原稿 (original manuscript) は、米国の Free Library of Philadelphia の Rare Book Department に保存されており、その原稿と挿し絵を用いて、ナーサリー・ライムも、もとの原稿どおりすべて含まれた版が、1968年に米国の Frederick Warne 社から出版され (クロス版の限定版1,500部と普及版12,000部)、1969年には、英国の Frederick Warne 社から5,000部が出版された。

本稿は、1968年の普及版 *The Tailor of Gloucester : From the original manuscript* を参照している。

この版によると、ポターのもとの原稿は、挿し絵を除いて考えると、1903年のウォーン社版の約2倍の長さで、全部で27篇のナーサリー・ライムが含まれており、その中には10連から成る長いナーサリー・ライムもある。それに対して、1903年のウォーン社版では、挿し絵は12枚から27枚へと大幅に増えているが、ナーサリー・ライムの方はわずか8篇しか含まれておらず、しかも、すべて一連から成る短いもので、中には、もとのナーサリー・ライムの1行だけを抜き出したものもある。

この本の表紙カバー見返し (flap) 部分の解説によると、テキストが縮められたり変更されたりするのを嫌うポター自身の出版による1902年の私家版でさえ、理由は不明だが、もとの原稿から約1,100語を削らざるを得なかったという。

種々の書き物の中から、1987年版では88篇、1995年版では53篇のナーサリー・ライムを収録し、⁶ 原典の挿し絵と共に、可能な限りビアトリクス・ポターのお気に入りのナーサリー・ライム集として一冊の本にしたものである。

この本には、*The Tailor of Gloucester* に関しては、1903年のウォーン社版からは削除されてしまったものも含め、ポターのもとの原稿から集められたナーサリー・ライムが、1987年版では23篇、1995年版では13篇収められている他、先に述べた *Appley Daply's Nursery Rhymes* (1917) のもとになった *the Appley Daply collection* (1905)⁷ からも、1987年版では35篇、1995年版では18篇のナーサリー・ライムが収められていて、ポターのナーサリー・ライムの世界を考える上で有益な編集となっている。

さらに、1995年版の表紙カバー見返し (flap) 部分には、次のような説明がなされている。

Some of the rhymes are traditional, quoted from Halliwell if Beatrix Potter's reference was too scanty; some are Beatrix Potter's special adaptations; others are Beatrix Potter's originals.

つまり、ポターが数々の「おはなし」の中に織り込んで、この本に再録されている53篇のナーサリー・ライムの中には、古くから伝承されているものと、ポターが工夫して改作したもの、そしてポター自身が自らの創造的な世界に遊んで創作したものが含まれ、さらには、古くから伝承されているナーサリー・ライムについて、それらが James Orchard Halliwell (以下、J. O. Halliwell) の *The Nursery Rhymes of England* (1842, 1843, 1844, 1846, 1853, c.1860) からの引用であることが示唆されて

⁶ この本の Publisher's note には、それぞれのナーサリー・ライムの出典が記されている。

⁷ *the Appley Daply collection* (1905) については、本稿2.0節で詳述する。

いる。⁸

本稿では、ポターが「おはなし」の世界に織り込んだナーサリー・ライムの中から、古くから伝承されてきたものと、ポターが工夫改作したものをいくつか取り上げ、その典拠とされるJ. O. Halliwellの *The Nursery Rhymes of England* の（数ある版のうち）初版とされる1842年版との実証的な比較を通して、ポターの〈絵〉と〈語り〉と〈うた〉の渾然一体となった創作世界におけるナーサリー・ライムの扱い方について考察を加えたいと思う。

1. ナーサリー・ライムの典拠について

ポターのナーサリー・ライムの扱い方という本題に入る前に、問題を整理するためにも、ポターが引用したと推測される原典または典拠について、歴史的な視座を意識しつつ多少の解説を付け加えておきたいと思う。

1.0. イギリスにおけるナーサリー・ライムの集成

今なおこの分野での有益な書物であり続ける平野敬一著『マザー・グースの唄—イギリスの伝承童謡』（1972年）（以下、平野（1972）と略

⁸ 事実、*Beatrix Potter's Nursery Rhyme Book* (1987) の Publisher's note では、1905年の the *Appley Dapply* collection全体と、*The Tailor of Gloucester*のもとの原稿にあったナーサリー・ライムの大部分とを含めて、この本を編んだという経緯のあとに、次のような説明がなされている。

… Often just a line or two from a rhyme appeared in her stories, but we have quoted the full version here from James Orchard Halliwell's *The Nursery Rhymes of England*.

すなわち、この本の publisher が、ポターはJ. O. Halliwellの *The Nursery Rhymes of England* からナーサリー・ライムを引用したと考えているか、あるいは、当時、ナーサリー・ライムといえば、J. O. Halliwellのこの本から引用するのが、ポピュラーであり、また正当であると考えられていたことが推測される。

記する)にも言及のあるように、イギリスにおけるナーサリー・ライムの集成は、次の画期的な3つの業績によって成されてきた。⁹

1.1. ニューベリー編『マザー・グースのメロディー』(18世紀後半)

第一に特筆すべきものは、18世紀後半のニューベリー(John Newberry, 1713-1767)編とされる『マザー・グースのメロディー』*Mother Goose's Melody: or Sonnet for the Cradle*¹⁰である。この童謡集は、イギリスのナーサリー・ライムに初めて「マザー・グース」(Mother Goose)という名を冠したものとされている。¹¹

この童謡集には、50篇あまりのナーサリー・ライム(Opie (1951, 1997)では51篇, Baring-Gould (1962)および平野(1972)では52篇と数えている)が収録されており、ある時はとぼけたような、ある時はしたり顔でひとを食ったような、ある時は金言・格言じみた言い方でさらりとかわすような独特な注解が付されているのが特徴である。Opie (1951,

⁹ 平野(1972) p.30 参照。もっとも、私見では、「イギリスにおける」という限定をはずせば、最後のところに米国のバーリン＝グールド夫妻の貴重な注釈付きの研究書を付け加えておきたい。

William S. Baring-Gould and Ceil Baring-Gould, *The Annotated Mother Goose* (1962) (以下, Baring-Gould (1962) と略記する)

¹⁰ Iona & Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (1951, 1997) (以下, Opie (1951, 1997) と略記する)によると、1765年頃に編まれたものらしい。

¹¹ Mother Gooseという名称が用いられた経緯については、諸説あるが、次の説が有力とされている。フランスの17世紀の作家シャルル・ペロー(Charles Perrault)による、「シンデレラ」などを含む有名な童話集に「鷺鳥おばさんの話」(*Les Contes de ma Mere l'Oye*)という副題がついていて、この童話集が1729年にロバート・サンバーによって英訳された時に、その部分が「マザー・グースの物語」と訳され、その訳本が好評で18世紀中に何度も版を重ねたため、「マザー・グース」という言葉が広く知られるようになった。ニューベリーは、そこに目をつけて、自分の編んだ童謡集に「マザー・グース」という名を採り入れたと考えられている。この説に関しては、平野(1972) pp.26-28 参照。

1997) や Baring-Gould (1962) は、『ウェイクフィールドの牧師』*The Vicar of Wakefield* (1766) などで知られるゴールドスミス (Oliver Goldsmith, 1730?-1774) が、この童謡集の隠れた編集者で、ニューベリーが出版業者なのだろうと考えている。¹² そして、平野 (1972) も、さらにはボードリアン図書館のオーピーコレクションの研究に携わるハウンスロー (David Hounslow) も、この独特な注解は、ゴールドスミスが付けたものと考えている。¹³

1.2. ハリウエル編『イングランドのナーサリー・ライム』(19世紀半ば)

続くナーサリー・ライム集成の第2の優れた業績は、19世紀半ばの、シェイクスピアの伝記で知られるシェイクスピア学者ハリウエル (James Orchard Halliwell, 1820-1879) による『イングランドのナーサリー・ライム』*The Nursery Rhymes of England* (1842) である。収録されたナーサリー・ライムは、実に600篇以上にのぼり、それに短い解説や注釈を付けたものである。ハリウエルは、民間に伝承されているナーサリー・ライムを学問的に取りあげようという意志のもとにその集成を行っており、その集成の方法は、文献学的あるいは、収集、分類、考証

¹² Opie (1951) pp. 33-35, Opie (1997) pp. 32-34, および Baring-Gould (1962) pp. 49-50 参照.

¹³ ハウンスローによると、この童謡集は、初版はもちろん、ニューベリーの義理の息子であり後継者であるトーマス・カーナン (Thomas Carnan) が1780年に出した版もそれ以前の版も現存していないらしく、現存が確かめられるのは、1791年にニューベリーの孫にあたる Francis Power によって発行されたもので、一冊だけ米国の Ball Collection に入っているという。本稿は、Francis Power からこの本の版木を引き継いだ John Marshall によって手直しされ1816年に再版されたもの (以下、*Mother Goose's Melody* (1816) と記す) の復刻版をもとにしている。 *The Opie Collection, The World of Mother Goose Part II, Bibliographical Introduction* (1996) pp. 125-133 参照.

という当時の学問的手順を踏んだものであった。この本の特徴は、600篇以上のナーサリー・ライムを14の項目¹⁴（後の版では18の項目）を立てて分類している点にある。

ハリウエルは、この童謡集のあと、さらに民話や俗謡を集め、『イングランドの俗謡と童話』 *Popular Rhymes and Nursery Tales* (1849) を出版した。このハリウエルによる2つの大著は、19世紀半ばから20世紀半ばまで、すなわち、1951年にオーピー夫妻の業績が登場するまで、ほぼ1世紀の間、イギリスのナーサリー・ライムの典拠であり、決定版であり続けたと言ってよいであろう。

まさにこの時代に生き、執筆活動をしていたビアトリクス・ポターにとっても、彼女の愛するナーサリー・ライムの正統な拠り所は、このハリウエルの2つの書物、特に、前者の *The Nursery Rhymes of England* (1842, 1843, 1844, 1846, 1853, c.1860) であったと考えることは恐らく間違いないことと思われる。

1.3. オーピー夫妻編『オックスフォード版ナーサリー・ライム辞典』 (20世紀半ば)

ハリウエルの *The Nursery Rhymes of England* の初版 (1842) が出てから、1世紀以上経って、オーピー夫妻 (Iona & Peter Opie) による『オッ

¹⁴ J.O. Halliwell による14の分類項目は、以下のようである。

1st Class: Historical (歴史的) 2nd Class: Tales (物語, おはなし)

3rd Class: Jingles (ジングル, 調子のよい唱え文句)

4th Class: Riddles (なぞなぞ) 5th Class: Proverbs (ことわざ, 格言)

6th Class: Lullabies (子守唄) 7th Class: Charms (おまじない)

8th Class: Games (ゲーム, 遊び唄) 9th Class: Paradoxes (パラドックス)

10th Class: Literal (文字遊び唄, 数え唄) 11th Class: Scholastic (学校に関する唄)

12th Class: Customs (風習) 13th Songs (歌, 歌謡)

14th Class: Fragments (その他)

クスフォード版ナーサリー・ライム辞典』*The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes* (1951) (以下, Opie (1951) と略記する) が登場した。オーピー夫妻は、現在ボードリアン(Bodleian)図書館にオーピーコレクション(the Opie Collection of Children's Literature)として収蔵されているナーサリー・ライムに関する膨大な資料を長年に渡って収集, 研究し, 上記の詳細な解説付きの辞典を編んだ他, *The Oxford Nursery Rhyme Book* (1955) や *The Lore and Language of Schoolchildren* (1959) を出版した。特に Opie (1951) は, 第2版(1997)も出て, まさに現在のナーサリー・ライム研究の典拠であり, 決定版と認識されているが, ビアトリクス・ポターの生きた時代には存在しなかったものであるため, 本稿では, 他の出典の根拠を探る手がかりとして, 個々のナーサリー・ライムの現在の形と, そこに付された解説の記述を利用するに留める。

2. ビアトリクス・ポターの作品にあらわれた

ナーサリー・ライム

本節では, 実際にビアトリクス・ポターの作品に登場したナーサリー・ライムをいくつか取りあげ, どのナーサリー・ライムからどの部分を引用し, 出典はどのバージョンで, どこをどう改作したのか, その改作の意図は何か, 等々の問いを設定しながら, ポターによるナーサリー・ライムの扱い方に接近していきたいと思う。

2.0. *Appley Dapply's Nursery Rhymes* と *Cecily Parsley's Nursery Rhymes*

ここで取りあげるのは, 全篇がナーサリー・ライムから成っていると言ってもよい *Appley Dapply's Nursery Rhymes* (1917) と *Cecily Parsley's Nursery Rhymes* (1922) の二作品である。どちらも8篇のナーサリー・ライムから成っている短い「おはなし」であるが, 実は, これに先だっ

て、1905年に、ポターと、ウォーン社の彼女の担当編集者であり恋人でもあったノーマン・ウォーン(Norman Warne)は、*Appley Daply's Nursery Rhymes* と題したナーサリー・ライム集を出そうとしていた。ところが、この本が完成する直前(同年8月)にノーマンがリンパ性白血病で倒れ、数週間後に亡くなるという悲劇が襲い、結局この本は出版されずに終わったのだった。¹⁵ その後、この中から8篇だけが上述の *Appley Daply's Nursery Rhymes* (1917)として出版されたが、残りは、the *Appley Daply collection* (1905)として、他の未収録のナーサリー・ライムと共に、*Beatrix Potter's Nursery Rhyme Book* (1984, 1987, 1995) として世に出るまで眠り続けることになったのである。

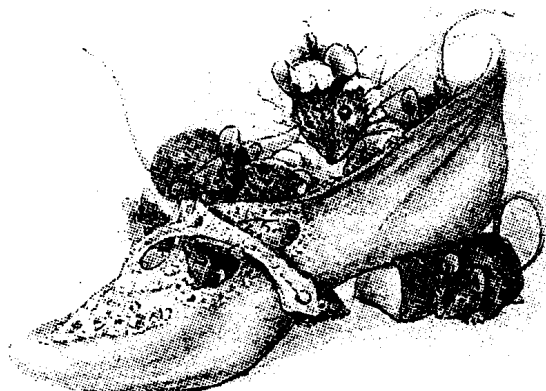
2.1. 「靴の中に住んでいるおばあさん」

'The old woman who lived in a shoe'

まず初めに、*Appley Daply's Nursery Rhymes* (1917) に登場する「靴の中に住んでいるおばあさん」のうたを見ていくことにする。

¹⁵ このナーサリー・ライム集には、0節でも触れたように、後に出版された *Beatrix Potter's Nursery Rhyme Book* (1987) から判断すると、少なくとも35篇以上のナーサリー・ライムが収録される予定であったことがわかる。

(1)



I think if she lived
in a little shoe-house —
That little old woman
was surely a mouse!

You know the old woman
who lived in a shoe?
And had so many children
she didn't know what to do?



(上記のうたと挿し絵は Beatrix Potter, *The Complete Tales* (2002) p.314 より)

靴の中に住んでるおばあさん
知ってるでしょう？
子供が多すぎて
どうしていいかわからないっていう
あのおばあさん

私思うに もし住んでいたのが
小さな靴のお家なら——
その小さなおばあさんは
きっと はつかねずみね！

(筆者試訳¹⁶)

¹⁶ 本稿のナーサリー・ライムの日本語訳については、以下すべて筆者の試訳であることをお断りしておく。

このうたのもと唄は、非常によく知られているもので、現在流布されている版では次のようになっている。

- (2) There was an old woman who lived in a shoe,
 She had so many children she didn't know what to do;
 She gave them some broth without any bread;
 She whipped them all soundly and put them to bed.

— Opie (1997) p.522

靴の中に住んでいるおばあさんがいた
 子供が多すぎてどうしていいやらわからない
 スープだけやってパンはやらず
 しっかりむち打ちベッドに寝かせた

Opie (1951, 1997) によると、文献初出は、*Gammer Gurton's Garland: or the Nursery Parnassus* (R. Christopher, 1784) (以下、*GG's Garland* (1784) と略す) である。本稿では、このうたの言葉の変遷を辿るために、*GG's Garland* の1810年版 (R. Triphook) の復刻版 (以下 *GG's Garland* (1810) と略す) によって、このうたを見ておくことにする。

- (3) There was an old woman, she liv'd in a shoe,
 She had so many children she didn't know what to do;
 She gave them some broth, without any bread,
 She whipp'd all their bums, and sent them to bed.

— *GG's Garland* (1810) p.21

このバージョンは、現在の(2)に非常に近いもので、4行めの *She whipp'd all their bums, and sent them to bed* (お尻をむち打ち、ベッドに追いやった) という部分の文言が多少異なるだけである。

Opie(1951, 1997) は、次に古い文献として *Infant Institutes* (1797) の次のようなバージョンを紹介している。(以下、ナーサリー・ライムの出典の後に付記した [] はオーピー夫妻の研究書における引用頁を示す.)

- (4) There was a little old woman, and she liv'd in a shoe,
 She had so many children, she didn't know what to do.
 She crumm'd 'em some porridge without any bread;
 And she borrow'd a beetle, and she knocked 'em all o' the head.
 Then out went th' old woman to bespeak 'em a coffin,
 And when she came back, she found 'em all a-loffeing.

— *Infant Institutes* (1797) [Opie (1997) p.522]

(4)のうたでは、2行めまでは、(2)や(3)のうたとほぼ同じだが、そのあと、「子供らにかゆをぶっかけ、パンは与えず、大づち借りてきて、頭をたたきのめし、棺桶を注文しに出かけるが、もどってみると、子供らはみーんな笑ってた」という、残酷だと思わせておいて、最後のどんでん返しで一挙にはぐらかす手法を用いたうたになっている。Opie (1951, 1997)でも指摘されているように、これと同じ仕掛けを持ったうたとしては、有名な 'Old Mother Hubbard' がある。よく知られたこのナンセンス詩は、14連から成る長いものだが、(4)と似ていると思われる第3連までを、現在の形であげておく。

- | | | |
|-----|----------------------------------|-------------------|
| (5) | Old Mother Hubbard ¹⁷ | ハバードおばさん |
| | Went to the cupboard, | 戸だなに行った |
| | To fetch her poor dog a bone; | あわれな犬に骨をとってきてやろうと |
| | But when she came there | でも行ってみたら |
| | The cupboard was bare | 戸だなは空っぽ |
| | And so the poor dog had none. | あわれな犬は何にももらえなかった |

She went to the baker's	ハバードおばさんパン屋に出かけた
To buy him some bread;	犬にパンを買ってやろうと
But when she came back	でももどってみたら
The poor dog was dead.	あわれな犬は死んでいた

She went to the undertaker's	ハバードおばさん葬儀屋に出かけた
To buy him a coffin;	犬に棺桶買ってやろうと
But when she came back	でももどってみたら
The poor dog was laughing.	あわれな犬は笑ってた

— Opie (1997) p.374

では、ポターの引用の拠り所となっている可能性の高い J. O. Halliwell の *The Nursery Rhymes of England* (1842) (以下、Halliwell (1842) と略記する) の中では、「靴の中に住んでいるおばあさん」のうたは、どのような形になっているのだろうか。Halliwell (1842) の分類の Second Class : Tales (物語, おはなし) に属しているこのうたは、次のような形になっており、現在の形(2)に近いものである。

¹⁷ このうたは、John Harris によって *The Comic Adventures of Old Mother Hubbard and Her Dog* と題した小型の toy book として 1805 年に出版され、あっという間に 10,000 部以上が出廻り、翌 1806 年に第 2 版が出版され、その後も毎年のようにいろいろな形で出版され続けた。Opie (1997) pp.374-380, および三宅 (1994) pp.50-58, 101 参照。

GG's Garland (1810) p.37 にもこのうたの第 1 連が (5) とほぼ同じ形で収録されている。

また、J. O. Halliwell の *The Nursery Rhymes of England* (1842) pp.60-62 には、(5) とほぼ同じ形の 14 連から成る長いうたが掲載されている。

- (6) There was an old woman who lived in a shoe,
 She had so many children she didn't know what to do;
 She gave some broth without any bread,
 She whipped them all well and put them to bed.

—Halliwell (1842) p.39

Halliwell (1842) には、また、このうたのスコットランド (Scotch) バージョンとして、次のうたが掲載されている。

- (7) There was a wee bit wifie
 Who lived in a shoe;
 She had so many bairns,
 She kenn'd na what to do.
 She gaed to the market
 To buy a sheep-head;
 When she came back
 They were a'lying dead.
 She went to the wright
 To get them a coffin;
 When she came back
 They were a'lying laughing.
 She gaed up the stair,
 To ring the bell;
 The bell-rope broke,
 And down she fell.

—Halliwell (1842) p.40

興味深いことに、このスコットランドバージョンは、先に見た *Infant Institutes* (1797) のバージョン(4)と話の展開がよく似ており、従って 'Old

Mother Hubbard'に通じる〈はぐらかし〉と〈意外な結末〉をもっているのである。

ここで、ポターの引用(1)にもどってみたい。引用の前半の表現から見ると、この頃すでに、この「靴の中に住んでいるおばあさん」のうたは、かなりよく知られていたと思われる。ポターの生きた年代を考えると、'Old Mother Hubbard'の種々のバージョン(註17参照)と共に、(3)(4)(6)(7)は、すべてその頃すでに流布していたバージョンであるが、その内容は、現在の(2)に近い系統と、(5)の'Old Mother Hubbard'に似た系統の2通りに分かれる。しかし、どちらの系統にしても、ポターが引用している最初の2行部分は変わらない。

ここで注目したいのは、そのあとにポター自身が付け加えたと思われる部分である。ポターは、「もし住んでいたのが小さな靴の家なら、その小さなおばあさんはきっとはつかねずみだろう」と結論づけてみせているが、この手法は、理にかなったことを言っていると見せながら、実は、「靴の中に住んでいるおばあさんは、子供が多すぎてどうしていいやらわからない」とくれば、当然「それでどうしたんだろう」と話の展開を期待する自然な論理的思考の流れを、わざとはぐらかして、本題から逸れたところで尤もらしい結論を与えるというものである。

この〈はぐらかし〉の手法とでも言うべきものは、他の伝統的なナーサリー・ライムの中にも多く見られるし、また、1.1節で述べたニューベリー編の *Mother Goose's Melody* (c.1765) の個々のうたに、ゴールドスミスが付けたと思われる人を食ったような独特の注解にも見られる。さらに、*GG's Garland* (1810) においても、個々のうたに付けられた真面目な学問的な注に混じって、数こそ少ないが、この種の注解が置かれているのにも驚かされる。

ここで、ゴールドスミスによって付けられたと思われる注解の例を2

つ取りあげてみたい。

- (8) **There was an old woman lived under a hill;
And if she's not gone, she lives there still.**

丘のふもとに1人のおばあさんが住んでいた

もしよそへ行っていなければ(死んでいなければ), まだそこに住んでいる

This is a self-evident proposition, which is the very essence of truth. "She liv'd under the hill; and if she's not gone, she lives there still." Nobody will presume to contradict this.

— *Mother Goose's Melody* (1816) p.17

これは自明の命題であり, 真理のまさに本質である。「彼女は丘のふもとに住んでいた。よそに行っていなければ(死んでいなければ)まだそこに住んでいる。」誰もこれに反論しはしないだろう。

(8)のナーサリー・ライム自体も, まさに〈はぐらかし〉の手法を用いたものであるが, それに付けられた注解も, 負けず劣らず, 注解として期待されている, 意図された読みの意味解釈はせずに, 論理学の用語をわざとらしく使うことによって表面上の解釈だけを行なっているという意味で立派な〈はぐらかし〉となっている。〈はぐらかし〉には〈はぐらかし〉を, という絶妙なウィットが感じられる。

もう1つの注解の例としては, 次のナンセンス詩とその注解を見てみたい。

- (9) **High diddle diddle,
The cat and the fiddle!
The cow jump'd over the moon;**

The little dog laughed
 To see such craft,
 And the dish ran away with the spoon.

ハイ デイドル デイドル
 猫とバイオリン
 雌牛が月を跳び越えた
 小犬が笑った
 そんな芸当を見て
 そしてお皿はスプーンと駆け落ちした

It must be a little dog that laughed, for a great
 dog would be ashamed to laugh at such nonsense.

— *Mother Goose's Melody* (1816) p.23

笑った犬は、小ものだったにちがいない。大ものの犬なら
 こんなばかげたことを笑うのを恥じるだろうから。

(9)のうたは、ナンセンス詩として非常によく知られたものであるが、それに付けられた注解もまた、このナンセンスに「センス(意味づけ)」を与えようとはせず、注解自体がナンセンスになっている。これも一種の〈はぐらかし〉である。

この種の〈はぐらかし〉の技法については、稿を改めて詳しく述べたいと思うが、ここでは、伝統的なナーサリー・ライムに付随しているこうした〈はぐらかし〉の精神をポター自身も愉しんでいて、(1)に見られるように、自らの創作の中でその種の〈はぐらかし〉の手法を試みていることに注目したい。

このことから、思わぬところで、というより口承文化の古層とでも呼びうるところで、新旧のナーサリー・ライムは手を握っており、明示的

ではないものの、そこに口承のうたの世界が広がっていることがわかる。とすれば、やはり、このようなくうたの世界が、ポターの〈絵〉と〈語り〉を支える要素のひとつとして存在するのではないかと思われるのである。

2.2. 「ニニイ・ナニイ・ネティコート」あるいは「リトル・ナンシー・エティコート」

‘Ninny Nanny Netticoat’ or ‘Little Nancy Etticoat’

2.1 節で扱った *Appley Dapply's Nursery Rhymes* (1917) に次いで2冊めのナーサリー・ライム集は、5年後の1922年に *Cecily Parsley's Nursery Rhymes* と題して出版されたが、そこに収められたナーサリー・ライムのいくつかは、挿し絵も含めてポターがすでに1890年代に書いていたものであった。その中のひとつに1897年に書かれたとされる謎掛けうたがある。

(10)



NINNY NANNY
NETTICOAT,
In a white petticoat,
With a red nose —
The longer she stands,
The shorter she grows.

(上記のうたと挿し絵は, Potter (2002) p.338 より)

ニニイ ナニイ ネティコート,
はいてる白いペティコート,
赤いお鼻で——
長く立っていればいるほど
どんどん背が低くなっていく

この謎掛けうたの答えは、ポターの絵にも描かれているように「火のついたろうそく」または、単に「ろうそく」である。

この謎掛けうたの現在の形は、次のようになっている。

- | | | |
|------|---------------------------|-----------------|
| (11) | Little Nancy Etticoat, | 小さな ナンシー エティコート |
| | With a white petticoat, | はいてる白いペティコート |
| | And a red nose; | 赤いお鼻で |
| | She has no feet or hands, | 手もなく足もない |
| | The longer she stands | 長く立っていればいるほど |
| | The shorter she grows. | どんどん背が低くなっていく |
| | — Opie (1997) p.385 | |

Opie (1951, 1997) によると、このうたの文献初出は、Randle Holme によると思われる Riddle Book の原稿 (c.1645) であり、その内容は次のようなものである。

- | | |
|------|---|
| (12) | I have a little boy in a whit [sic] cote [sic] |
| | The biger [sic] he is the lesser [sic] he goes |
| | —— ? Randle Holme MS (c.1645) [Opie (1997) p.385] |

(10)や(11)で「白いペティコートをはいた女の子」は、この古いバージョンでは、「白いコートを着た男の子」だったことがわかる。

Opie (1951, 1997) によると、次に古い文献 *Royal Riddle Book* (1820) では、(11)の4行めがない形であったという。この点では、ポターの引用(10)に近い形であると推測される。また、主人公の名前は、‘coat’あるいは‘petticoat’と韻を踏む形で、Old Nancy Netty Cote, Nanny Goat, Little Miss Hetty Cote と変遷して、現在の Little Nancy Etticoat になったようである。

Beatrix Potter, *The Complete Tales* (2002) の解説 (About This Book) に

よると、このうたは、「古いナーサリー・ライムに基づいている」とあるのだが、いったいどのバージョンに基づいているのであろうか。

Newberry 編の *Mother Goose's Melody* (c.1765) の 1816 年版にはこのうたは載っておらず、*GG's Garland* (1784) の 1810 年版にも載っていない。だが、Halliwell (1842) には、次のような形で掲載されている。

- (13) Little Nancy Etticoat,
 In a white petticoat;
 The longer she stands,
 The shorter she grows.
 — Halliwell (1842) p.93

これは、(11)に示した現在の形と比べると、3行めと4行めを欠いた形であるが、(10)のポターの引用に非常に近い形である。ただし、主人公の名前が多少異なっている点と、ポターの引用には現在の形(11)の3行めと同じ‘With a red nose’というフレーズが付いている点が異なる。

なお、オーピー夫妻の *The Lore and Language of Schoolchildren* (1959, 1967) には、学校の児童から集めた謎掛けうた (rhyming riddle) として、類似のうたが収録されている。

- (14) Little Nancy Netticoat
 Wears a white petticoat,
 The longer she lives
 The shorter she grows,
 Little Nancy Netticoat.
 — Opie (1967) p.77

ここには、ポターの引用と類似した‘Netticoat’という名前が見られる。

主人公の名前は、2行めの‘petticoat’と脚韻を踏めばよい訳だから、(11)や(13)のように‘Etticoat’でも、このうたのように‘Netticoat’でも不都合はない。また、同時に頭韻も用いて調子よくしようとすれば、(14)のように‘Nancy Netticoat’や、ポターの(10)のような‘Ninny Nanny Netticoat’になっても不思議はない。この部分がポターの改作であるのかどうかは、現時点では不明である。しかし、古くからある謎掛けうたの‘Humpty Dumpty’に見られるような調子のよい押韻による名前の付け方は、ポターのナーサリー・ライム集の題名にもなっている‘Appley Dapply’, ‘Cecily Parsley’や、前者に登場するもぐらの‘Diggory Diggory Delvet’に見られるように、ポターの得意とする名付け方であったように思われる。

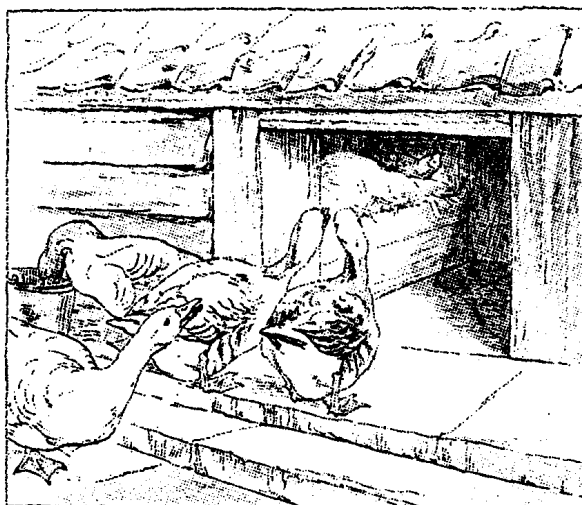
こうしたテキストの比較をすることによって始めて、ここには、ポターの言語感覚、とりわけ、伝統的な口承のうたの基底にあるリズムと音に対する嗜好がはっきり現われていると言えるのではないだろうか。

2.3. 「があ があ がちょうさん」

‘Goosey, Goosey, Gander’

ポターの *Cecily Parsley's Nursery Rhymes* (1922) に登場するもう1つの伝統的なナーサリー・ライムとして、次のうたがある。

(15)



(左記のうたと挿し絵は,
Potter (2002) p.334 より)

GOOSEY, GOOSEY, GANDER,
Whither will you wander?
Upstairs and downstairs,
And in my lady's chamber!

があ があ がちょうさん
ぶらぶらどこ行くの?
階段上って階段下りて
奥様の寝室へ!

このうたの現在流布しているバージョンは次のようなものである。

(16) Goosey, goosey gander,
Whither shall I wander?
Upstairs and downstairs
And in my lady's chamber.
There I met an old man
Who would not say his prayers.
I took him by the left leg
And threw him down the stairs.
— Opie (1997) pp.223-224

があ があ がちょうだ
ぶらぶらどこ行こう?
階段上って階段下りて
奥様の寝室へ
そこで爺じいいとはち合わせ

お祈りの文句も言おうとしないやつ
 それでそいつの左足つかんで
 階段の下へほうり投げてやったんだ

(15)と(16)の大きな違いは、(15)には、(16)の5行め以下がないことであるが、もうひとつ気になるのは、2行めの問いの主体(つまり、主語)である。(16)では、雄のがちょう(gander)が、自ら「ぶらぶらどこへ行こうか?」と言っているのに対し、(15)では、雄のがちょうに対して、「がちょうさん、がちょうさん、ぶらぶらどこへ行くの?」と尋ねていることになる。一見、小さな違いのように見えるが、実は、大きな意味合いの違いを醸し出すことになる。その点についてはこの節の後の方で触れることにして、まず、このうたの成立過程を見ておきたい。

Opie (1951, 1997)によると、この唄の初出文献は、*GG's Garland* (1784) である。そのうたは、Opie (1997)に引用されているものも、手許にある *GG's Garland* の1810年版も同一で、次のような形になっている。

(17) goose-a, goose-a, gander,
 Where shall I wander?
 Up stairs, down stairs,
 In my lady's chamber;
 There you'll find a cup of sack¹⁸
 And a race¹⁹ of ginger.

— *GG's Garland* (1784) [Opie (1997) p.224]

— *GG's Garland* (1810) p.24

があ があ がちょう
 ぶらぶらどこ行こう?
 階段上って階段下りて

奥様の寝室へ

そこにあるのは一杯のサック酒と

ショウガの根 (ぴりっとした味 元気のもと)

ここでも、2行めの問いの主体は自分で、「ぶらぶらどこへ行こうか」と言っているのである。ただし、奥様の寝室で一杯のサック酒を見つけることになるのは、その自分なのか、あるいは、1行めで自分が雄のがちょうど呼びかけているのだと解釈すると、その雄のがちょうどなのか、判然としない。ただ、1行めの‘goose-a, goose-a’あるいは(16)の‘goosey, goosey’には、いまひとつだらしなくて(「勇気がない」, 「元気がない」という意味で)思い切った行動がとれない、という意味が込められてい

¹⁸ サック酒 (16-17世紀にスペインおよびCanary諸島などから輸出された辛口の白ワイン)

¹⁹ (ショウガの)根

奇しくも、ポターの初期作品である *The Tailor of Gloucester* (1902, 1903) のもとの原稿(註5参照)には、(17)の後半4行分に類似した次のようなうたが織り込まれている。

- (i) Upstairs and downstairs,
 Upon my lady's window,
 There I saw a cup of sack,
 And a race of ginger! —

— *The Tailor of Gloucester : From the original manuscript* (1968) P.47

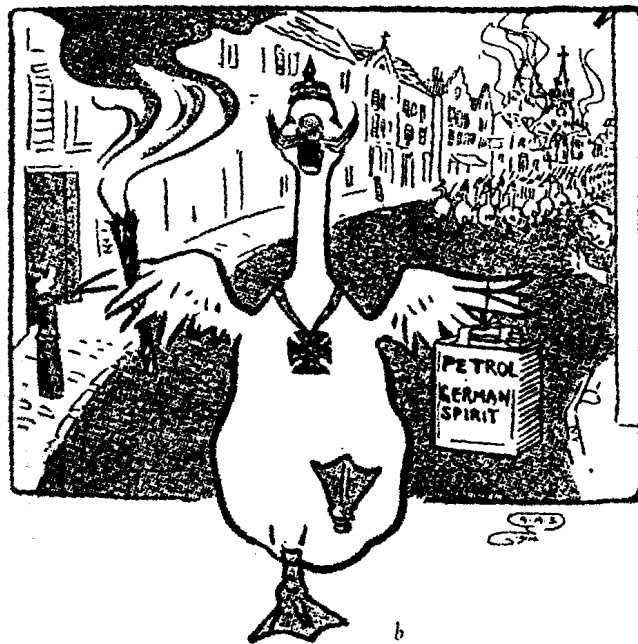
そして、この1968年版に付されているGlossaryでは‘race (of ginger)’の語義は‘root (of ginger)’つまり「(ショウガの)根」となっている。さらに、Baring-Gould (1962) pp.86-87でも同様の注釈が付けられている。

この‘race’は、また、別の語源を有する語義として「酒の風味、特有の味」とも解釈できる。この意味の‘race’とその形容詞形の‘racy’には、「ぴりっとした(ところ)」という意味から「活気(のある), 元気(のある)」という含意がある。

一方、‘ginger’の語義にも「ぴりっとした辛味」という意味から「生气, 活気, 元気」という含意があることが知られているが、(17)のような場面で、このようなイメージが幾重にも重なりあって想像がどんどん拡がっていくところは、いかにも伝承のうたらしい懐の深さである。

るように思われ、それが、階段を上ったり下りたり、うろうろしている様子と結びついていくことになる。そして、いざ奥様の寝室に入ってみると…。そこにある辛口のサック酒とショウガの根、あるいはそのぴりっとしたジンジャーの味は、元気づけの一杯なのだろうか。そのイメージと呼応するかのように、Opie (1997) には、ナーサリー・ライムにもとづいた漫画として、G.A. Stevens による ‘Kaiser, Kaiser-gander’ と題する1914年の漫画が載っていて、そこには、「石油、ドイツの強い酒」と書かれた缶をぶらさげて、多勢のガチョウを引き連れ、怪気炎を上げている雄のガチョウの姿が描かれている。(次の(18)参照)

(18)



CARTOONS BASED ON NURSERY RHYMES
b. ‘Kaiser, Kaiser-gander’, by G. A. Stevens, 1914

— Opie (1997) p.225

一方、(16)の後半の4行は、Opie (1951, 1997) によると、もとは全く別の唄で、学童期の子供たちが、‘足長爺さん(Daddy-long-legs or Father-long-legs)’ と呼ぶ虫 ‘ガガンボ (cranefly)’ を見つけると唱えたり、あ

るいは、この時期特有の好奇心と無邪気な残酷さで、ガガンボの細くて長い足をつかんだり、引っぱって抜いたりしながら唄う次のようなうたから来ているのだろうと推測されている。

(19) Old father Long-Legs²⁰

Can't say his prayers:
Take him by the left leg,
And throw him downstairs.

— Opie (1997) p.224

これが何かの拍子に(17)のうたの前半4行と結びついて、次のような融合形が生まれたと考えられる。²¹

(20) Goosey Goosey Gander where shall we wander

Up stairs and down stairs and in my Lady's chamber.
Old father long legs will not say his Prayers,
Take him by the left leg and throw him downstairs.

— Contemporary MS addition to Bussell copy of
MG's Melody (c.1803) [Opie (1997) p.224-226]

(17)の前半4行と(19)のこのような融合は、前者の 'up stairs, down stairs' と後者の 'downstairs' という共通の語を踏み台にして、ぶらぶらと不

²⁰ Opie (1951, 1997)によると、このうたの初出文献は、*Nancy Cock's Pretty Song Book* (John Marshall, c. 1780)であり、この版では(19)の後にさらに次の4行が続く。'And when he's at the bottom,/ Before he long has lain,/ Take him by the right leg, / And throw him up again' Opie (1997) p.226 参照。

²¹ Baring-Gould (1962) も、上記 (註20参照) の長いバージョンを掲げて、このうたと(17)のうたとの奇妙な融合によって現在の(16)の形が成立したという見解を述べている。Baring-Gould (1962) p.70 および pp.86-87 参照。

器用に階段を上ったり下りたりするふがない雄ガチョウのイメージと、ガガンボの不格好なほど細く長い足でふらふらと歩く姿が重なって起こったのではないかと思われる。ナーサリー・ライムでは、もともと、韻を踏むためにたまたま置かれた語によって、空想が自由に広がることは、ごくあたり前のことであり、また、中澤（1994）で扱ったように、共通の語や部分的なイメージの重なりを切っ掛けとして、2つの（時には、3つ以上の）うたが融合して1つのうたになる²²ことも、稀ではない。

さらに、(17)と(19)が融合してできた(20)の唄は、Halliwell（1842）では、次のように、ほぼ現在の形になっている。

(21) Goosy goosy gander!
 Where shall I wander?
 Up stairs and down stairs,
 And in my lady's chamber;
 There I met an old man,
 That would not say his prayers.
 I took him by the left leg,
 And threw him down stairs.

— Halliwell (1842) p.92

ここで、5行めに登場するものが、ガガンボの「足長爺さん」から、文字通り人間の「爺さん」に変わったのは、‘Old father’ と ‘old man’ の類似もさることながら、もと唄である(17)の5行めが、「そこで見つけるのは…」 ‘There you'll find …’ という展開になっており、この ‘there’ が、奥様の寝室という、場所が場所だけに、ガガンボという単なる虫で

²² 中澤紀子（1994）第4節参照。

はなくて、人間のいわゆる「悪い虫」になり、つまみ出されて階段の下に放り投げられることになるのであろう。太田(2001)が指摘しているように、「ガガンボの足長爺さん」が単なる昆虫から人間の「老人」に変わったとき、全体の意味に大きな変化がもたらされることになったのである。つまり、なにやら怪しげな女性の部屋に入り込んで、祈りもおろそかにするような好色な爺さんは痛い目に遭うぞ、という教訓的な民話の様相を獲得したのである²³。

では、ポターの作品に登場する(15)は、こうした、いかがわしい雰囲気漂浮させているだろうか。答えは否である。古い形の(17)には、多少気配が感じられた大人の世界のいかがわしい雰囲気は、(21)や(16)では、かなり濃厚に感じとれるが、(15)では、ポターが意識的にか無意識にかはわからないが、2行めの主体を‘I’ではなく‘you’に変えたことによって「があ があ がちょうさん ぶらぶらどこ行くの?」という、がちょうを完全に客体化した表現になり、また、もとのうたが(17)の形であれ、(21)の形であれ、後半を切り落としてしまったことにより、大人の世界のいかがわしさは全く感じられなくなり、無邪気な子供向けのうたに留められている。彼女の〈絵〉と〈語り〉は、この次元では、まさにその安定した無垢の世界によって支えられていると言ってよいだろう。

3. おわりに

古くから伝承されているナーサリー・ライムを愛好したことでも知られるビアトリクス・ポターであるが、このようなナーサリー・ライムの扱い方は、読者を子供に限定したがゆえに、行なわざるを得ないと感じた結果の改変なのだろうか。それとも、ポターの生きたビクトリア朝と

²³ 太田雅孝(2001) pp.14-15 参照。

いう時代の良風美俗的な言説上の制約が、ポターをして、毒のない形での伝統的なナーサリー・ライムの引用、そして創作を余儀なくさせたのだろうか。

それとも、このようなナーサリー・ライムの扱いは、逆に、当時非常によく知れ渡っていたテキスト全体から、後半の大人の世界のいかがわしさを反映している部分を敢えて削除することによって、消したはずのものと唄が大人の読者の意識の中ではかえって透けて見えてくる、いわば見せ消ち)の手法とでも言うべきものになっているのだろうか。ポターの半生を考え合わせたとき、少なくとも後世の我々の目には、消さざるを得なかったもと唄の部分が、かえって浮き出見えてくるのである。

ポターは、作者にも読者にも判っているテキストの一部を敢えて削除することによって、ビクトリア朝の典型的な良俗意識と階級意識を持つ実の母親と最後までわかり合えなかった境遇、キノコの研究に没頭し博物学者になる夢を持つが、当時、女性には学会発表をはじめとする学問の世界への門戸が閉ざされていたことによってその道を捨てざるを得なかったことによる締観、また、彼女の才能を最もよく理解していた、彼女の担当編集者であり、婚約までした恋人であったノーマン・ウォーンの結婚直前の急死による絶望感、さらには、家族の中で唯一の味方であり、理解者だった弟バートラムの46歳での早すぎる死による喪失感など、幾重にも層をなす人生の負の重圧を何とか転化させようとしていたのだろうか。

もっと大きな視点でとらえてみると、ポターにとって、このような負の重圧に対処するには、身近な自然や小動物との世界に没頭し、一見平和でのどかな「おはなし」の世界に自らの創作世界を求めずにはいられなかったのだろうか。そして、その一方で、ポターは、〈絵〉と〈語り〉の世界にナーサリー・ライムという清濁合わせ持った伝承の〈うた〉の

世界を繋ぎとめることによって、いわば英国の大人と子供の世界の基底に流れる必ずしも無垢ではない世界に自らの世界の通路を開いたのかもしれない。

ポターがその作品の中で引用したり、創作を加えたりした数々のナーサリー・ライムをもとの形と実証的に比較していくことは、一見単純そうに見えるポターの創作姿勢や創作環境の奥に潜む屈折した深層を知る上で、実に興味深く重要な要素を浮かび上がらせることになるのである。

参考文献 ※出版年代順

ビアトリクス・ポター (Beatrix Potter) 関係

- Potter, Beatrix (1901) *The Tale of Peter Rabbit*, Privately Printed, Strangeways & Sons., London.
- Potter, Beatrix (1902) *The Tale of Peter Rabbit*, Frederick Warne & Co., London.
- Potter, Beatrix (1902) *The Tailor of Gloucester*, Privately Printed, Strangeways & Sons., London.
- Potter, Beatrix (1903) *The Tailor of Gloucester*, Frederick Warne & Co., London.
The edition with reset text and new reproductions of Beatrix Potter's illustrations, 2002.
- Potter, Beatrix (1903) *The Tale of Squirrel Nutkin*, Frederick Warne & Co., London.
- Potter, Beatrix (1905) *The Tale of Mrs. Tiggly-Winkle*, Frederick Warne & Co., London.
- Potter, Beatrix (1910) *The Tale of Mrs. Tittlemouse*, Frederick Warne & Co., London.
- Potter, Beatrix (1911) *The Tale of Timmy Tiptoes*, Frederick Warne & Co., London.
- Potter, Beatrix (1913) *The Tale of Pigling Bland*, Frederick Warne & Co., London.
- Potter, Beatrix (1917) *Appley Dapdly's Nursery Rhymes*, Frederick Warne & Co., London. The edition with reset text and new reproductions of Beatrix Potter's illustrations, 2002.
- Potter, Beatrix (1922) *Cecily Parsley's Nursery Rhymes*, Frederick Warne & Co., London. The edition with reset text and new reproductions of Beatrix Potter's illustrations, 2002.
- Potter, Beatrix (1930) *The Tale of Little Pig Robinson*, Frederick Warne & Co., Lon-

don.

Potter, Beatrix (1968) *The Tailor of Gloucester: From the original manuscript*, with Introduction by Leslie Linder, Frederick Warne & Co., New York and London.

Potter, Beatrix (1984) *Beatrix Potter's Nursery Rhyme Book*, Frederick Warne & Co., London. The edition with new reproductions from the original illustrations, 1987; The edition with new reproductions of Beatrix Potter's illustrations, 1995.

Taylor, Judy (1986) *Beatrix Potter: Artist, Storyteller and Countrywoman*, Frederick Warne & Co., London. New edition, 1996; Japanese edition, 『ビートルクス・ポター — 描き, 語り, 田園をいつくしんだ人』吉田新一訳 福音館書店 2001年.

Buchan, Elizabeth (1987) *Beatrix Potter: The Story of the Creator of Peter Rabbit*, Hamish Hamilton Children's Books. New edition, Frederick Warne & Co., London 1998; Japanese edition, 『くピーターラビット〉の作家 素顔のビートルクス・ポター — 絵本をつくり, 湖水地方を愛し, 農園生活を楽しんで』吉田新一訳 絵本の家 2001年.

Potter, Beatrix (1989) *The Complete Tales*, Frederick Warne & Co., London. Revised edition, 1997; Centenary edition, 2002.

三宅興子 (1994) 『イギリス絵本論』 翰林書房

吉田新一 (1994) 『ピーターラビットの世界』 日本エディタースクール出版部

新井満・新井紀子 (2002) 『ピーターラビット紀行 — ふたりで行くイギリス湖水地方の旅』 河出書房新社

BEATRIX POTTER COLLECTION 文献目録 大東文化大学図書館・英米文学科所蔵 2003年10月

マザー・グース または ナーサリー・ライム (Mother Goose or Nursery Rhymes) 関係

? Holme, Randle (c. 1645) MS (manuscript) Riddle Book, (MS Harley, 1960).

? Newbery, John (c. 1765) *Mother Goose's Melody: or Sonnets for the Cradle*, edited and/or annotated by ? Oliver Goldsmith, MS compiled in c. 1765.

** Revised edition (1816), printed and sold by John Marshall, London;

** Facsimile edition reproduced from the Opie Collection of Children's Literature held by the Bodleian Library, Oxford by HOLP SHUPPAN, Publishers. Tokyo 1996.

Nancy Cock's Pretty Song Book (c.1780) *Nancy Cock's Pretty Song Book for all Little Misses and Masters*, John Marshall, London.

Ritson, Joseph (1784) *Gammer Gurton's Garland: or The Nursery Parnassus*, R. Christopher, London. Enlarged edition, Christopher and Jennett, c. 1799;

*Enlarged edition (1810), compiled by Ritson's biographer Haslewood, printed for R. Triphook by Harding and Wright, London;

* Facsimile edition reproduced from the Opie Collection of Children's Literature held by the Bodleian Library, the University of Oxford by HOLT SHUPPAN, Publishers. Tokyo 1992. [以下, 参考文献中の*印は, ほるぷ出版による1992年の復刻版を示す.]

Infant Institute(1797) *Infant Institutes, part the first : or a Nurserical Essay on the Poetry, Lyric and Allegorical, of the Earliest Ages, & c.*, [Notes and Queries, 1849-1950, 5th s., iii, p.441].

*Halliwell, James Orchard (1842) *The Nursery Rhymes of England*, printed for the Percy Society, by T. Richards, London. Revised and enlarged, 1843, 1844, 1846, 1853, and c. 1860.

Halliwell, James Orchard (1849) *Popular Rhymes and Nursery Tales*, John Russel Smith, London. Revised and enlarged edition, c. 1860.

Opie, Iona and Peter (1951) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, first edition, Oxford University Press.

Opie, Iona and Peter (1955) *The Oxford Nursery Rhyme Book*, Oxford University Press.

Opie, Iona and Peter (1959) *The Lore and Language of Schoolchildren*, Oxford University Press. Oxford University Press paperback, 1967.

Baring-Gould, William S. and Ceil Baring-Gould (1962) *The Annotated Mother Goose*, with an Introduction and Notes, Bramhall House, New York.

平野敬一(1972)『マザー・グースの唄—イギリスの伝承童謡』[中公新書] 中央公論社 昭和47年

平野敬一(1974)『マザー・グースの世界—伝承童謡の周辺』[エレクトク選書] ELEC出版部

Alderson, Brian (1986) *Sing a Song for Sixpence: the English Picture Book Tradition and Randolph Caldecott*, Cambridge University Press and British Library Board. Japanese edition, 『6ペンスの唄をうたおう—イギリス絵本の伝統とコールデコット』 吉田新一訳 日本エディタースクール出版部 1999年.

- 中澤紀子(1993 a)「伝承文化と言語環境に関する一考察—アメリカで出会ったマザー・グース」『大東文化大学紀要』第31号, 平成5年3月
- 中澤紀子(1993 b)「伝承文化における語彙とイメージの喚起性—擬声語で始まるマザー・グース」『大東文化大学創立70周年記念論集』 平成5年9月
- 中澤紀子(1994)「英語圏の伝承童謡にみられる共通の型について—「Little+人の名」で始まるマザー・グース」『大東文化大学紀要』第32号, 平成6年3月
- The Opie Collection, The World of Mother Goose Part II, Bibliographical Introduction, compiled by HOLP SHUPPAN, Publishers. Tokyo 1996.*
- Opie, Iona and Peter (1997) *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, second edition, Oxford University Press.
- 中澤紀子(2000)「Mary, Mary, quite contrary—マザー・グースと悲劇の女王」『英米文学論叢』第31号, 大東文化大学英文学会
- 太田雅孝(2001)「マザー・グースは丘を越えて—両義的な経験の方位へ」『人文科学』第6号, 大東文化大学人文科学研究所
- 中澤紀子(2001)「マザー・グースのうたのリズム」『人文科学』第6号, 大東文化大学人文科学研究所